

第19回「文芸思潮」現代詩賞 発表

第一九回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。おかげさまで三二一名の方から八〇六篇の作品をご応募いただき、充実したコンテストとなりました。心から御礼申し上げます。

五月末に集まった応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通して作品を対象に、十一月一日、渡辺みえこ、五十嵐勉各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

今号には最優秀賞・優秀賞を掲載させていただきますが、奨励賞作品も、次号以降できるだけ「文芸思潮」誌上に掲載させていただく予定です。

授賞式は、申し訳ございませんが、ただいま検討中です。佳作以下の賞状・賞品・賞金などは明年一月下旬までに直接受賞者に発送させていただきます。

第二十回「文芸思潮」現代詩賞は、明年、これまでと同じ要領で募集を行います。どうぞ奮って御応募ください。

「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

第19回「文芸思潮」現代詩賞

最優秀賞

「対岸」

「干上がる鯨」「玄界灘」

河 槌こう じょう
(東京都世田谷区)

優秀賞

「アルベド」「誕生」「天国一丁目」

水庭まみ (神奈川県横浜市)

「絶望讃歌」「空白の青春」「命のいたずら」

十路田道広 (福岡県福岡市)

「春日」「古墳」清水一美

(東京都立川市)

「潜水」「砂浜と同じ熱をしている」

「島舞い」赤澤玉奈

(東京都練馬区)

「五月の響き」「五月の雪」「走る『思い出』」

遠藤芳子 (東京都柏江市)

「無の乱打」「しくじった奴隷」「見聞」

木戸秋波留紀 (神奈川県川崎市)

「小さな街に捧げる詩」「叫びの木霊が」

「球形の表面で」森下万尋

(千葉県市川市)

奨励賞

「滲む」「こころあらし」「天と地との間に」

大門真央 (東京都世田谷区)

「荒野フルボディ」「スリーアイ」Movable Long

UKbik+UKnvy 讃頌「082」

マッシバンバータ (大分県速水郡)

「虹」シヨッピングモール「病室」

阿部久市 (茨城県牛久市)

「新宿駅、午前二時」きつと世界の終わり、蒼が砕け散る」

北村灰色 (埼玉県和光市)

「観音様を見送る日」夏の落とし物「常若の器」

上木戸晃 (北海道北見市)

「慟哭」追憶を超え」久利潤保

(福岡県久留米市)

「審判の箱」

泉水雄矢 (福岡県福岡市)

「どぶから柱」椿「白い肌」橋いずみ

(鳥根県出雲市)

「わったー」風土「空から降る声」

幸地チカソ (沖縄県中頭郡)

「憧れのマーシャラー」若林麻衣子

(東京都世田谷区)

「心臓の天蓋の流動」亡葉乃胸ーナハノムネー」

「夜露を纏いて舞う姫」曲田尚生 (京都府京都市)

選評

詩の主題と形式

渡辺みえこ

第一九回『文芸思潮』現在詩賞応募作品は、全体にレベルが高く、それぞれのテーマを持ち、そのための形式を追求している様子が窺がわれた。

詩の言葉も伝統的和歌、俳句の短詩系文学を継承してはいるが、近・現代詩は、自由であるがゆえに、著者自身が、テーマ、形式を作り上げなくてはならず、より大きな創造性が求められる。

類型的、常識的表現は、創作であるので避けなければならないが、安易な造語は独りよがりになりがちなので注意してほしい。句読点や一行の長さなども全体の統一が必要である。

詩は評論などとは違い論理では割り切れない領域を表現するため、比喩や寓話なども使われ、多義的解釈ができるようにする。そのため概念語や価値判断（美醜、善悪……）、イデオロギー的な言葉などは固定化され、意味伝達のみに狭められてしまうので使い方には注意が必要である。

リテイがあり、「玄界灘」は場面展開にスピード感、リズムがある。僕の夢から始まる連が六連あるが、四連目あたりをもう少し広げて展開すると、平板さがなくなり、ダイナミックになるのではないだろうか。

優秀賞の赤澤玉奈氏「潜水」は、潜水という体験が、身体で感知したものを言語化しようとしていて、水との関係を内部から観察し、映像的に展開している。「透過する血管」などの比喩が巧みだ。「砂浜と同じ熱をしている」でも溶解する「あなた」の不確かさを表現している。二連目の八行目、「知れども」は、現代語で書いているので、「知りつつ」等と文体を統一したほうがよい。

同じく優秀賞の遠藤芳子氏は、「五月の響き」「五月の雪」「走る『思い出』」「三編とも、静かな中に深みがあり、存在することの悲哀が表現され、詩形も整って自己の文体ができている。

木戸秋波留紀氏「無の乱打」は若さの彷徨や熱狂が表現されているが、タイトルのような表現は生々（なまなま）な説明になってしまいがちなので、冒頭の三行のような、現実描写で表現したほうが強さもあるのではないだろうか。「しくじった奴隷」はある状態を表現しているので寓話性、広がりが出ている。

清水一美氏は、日本語・日本文化の伝統を大事にして、表現しがたいものを柔らかな言葉の中に模索し、自己に新

奨励賞

「世界樹」vector」 インバ（奈良県奈良市）

「身に余る人生」「自由前夜」「等身大」

実川阿仁（東京都葛飾区）

「湿り」「鉄は、骨よりも速い」「風景と皮膚」

川寄雄司（東京都荒川区）

「抗体集団」「しおれる／ふたたび」「血縁」

今宿未悠（東京都世田谷区）

「たわむれどき」「矛盾」中村郁恵（北海道札幌市）

「いずれ、雨になる」「太陽の食卓」

徳丸魁人（愛知県安城市）

「卒業証書」「十八ごときのさみしさ」

色透 諷（東京都杉並区）

「味蕾に針」「たたかいのまえのたたかい」「もつと脳を鍛える大人のDSトレーニング」

渡辺八登（東京都西東京市）

最優秀賞の河橋氏「対岸」は、映画のフラッシュバック技法のように鮮明な場面が展開され、非現実的な夢の言語も新鮮で生き生きしている。読者がなじみがないような方言などは注を入れたほうがより伝わりやすい。「干上がる鯨」は、シュールレアリスムの異世界のイメージにリア

しい形象を与えようとしている。著者の見ている対象をもう少し具体的に表現すると、古典につながる現代詩として著者独特の世界が形作られるだろう。

水庭まみ氏「アルペド」は、「わたし」という存在の不可思議さを状況描写で表現しているのがよい。このように様々な角度から観察し表現できると思う。価値判断の言葉や、甘い情緒的な表現には注意が必要である。

十路田道広氏「絶望讃歌」は、存在の苦しさ、もどかしさが表出されている。それ故に、言語が、類型的散文的になりがちである。例えば「身の内側に負った火傷」「地の底で聞いた音」という表現を、それはどんな痛み、音だったか、私の身はどんな反応をしたか、などを細かく書き記してみても、異なった表現と並列させてみると、新しい表現を発見できることもある。

森下万尋氏は、「小さな町に捧げる詩」「叫びの木霊」は、詩語も詩形も整っている。詩語が豊富だが、中心になるイメージ以外を少し抑えるなら、さらに明確に伝わってくる部分がある。

奨励賞の橘いずみ氏の、人間を含めた生き物が泥土のようなものからやってきて、湿気を維持し、生成と腐敗の循環の中にいることの視点は大事だ。周知の一般的知識は解說的になりがちなので、著者の感じ取った具体的な事柄を表現して読者に伝えてほしい。

川崎雄司氏は湿度というテーマで、科学的に検証していく過程に詩情を見出している。客観的記述と自己の知覚を対比させる、身体の内と外の知覚なども深めていくとよい。徳丸魁人氏、雨や水に還っていく自然の循環には、東洋的救いのようなものも感じられる。「いずれ、雨になる」の最終二行はない方が余韻が出るのではないか。

マッシバンバクタ氏、リズムや速度があり、打楽器で打ち込んだような言語の連打の響きが残る。断絶する連のつながりのある部分も三連目あたりにあると著者の意図がもっと伝わってくるのではないだろうか。

久利潤保氏は、心の中に抱えた詩情をかたちにするにふさわしい言葉を探しているであろう。もどかしさが伝わってくる。人が現実に出逢う、感動や苦難や、悔恨や、それらにびつたりした言葉にすることは、困難な作業だ。現代詩での漢熟語は、強い意味を持つので、適切な位置に効果的に使いたい。抱えている多くの言葉を大事にして詩を書き続けていってほしい。

若林麻衣子氏は、マシーナリーになった「あなた」について共感をこめた澄んだまなざしで表現されていて、三連四連は状況が浮かぶ。「憧れ」という言葉は、甘く情緒的に使用されることが多いので、もうすこし象徴的な表現をしたほうがよい。

今宿未悠氏「抗体集団」は、最終連に詩情が表現されて

これを自己自身の大事なメモにして、これを元にして詩はいくつも書けるのではないだろうか。設定も場所もいろいろ変えて。

北村灰色氏「新宿駅、午前二時」は、第十八回の「池袋午後二時」の連作であろう。池袋も新宿もいろいろな場所があり、渋谷もまた違った部分がある。批判は固定的になるので、詩では現実描写に留めたほうがよい。十二行目の「虚無また虚無」は、いつまでも踊り続ける様子などの描写にすると、現実的虚無感が詩の形で出る。「きつと世界の終わり、蒼が砕け散る」は、言葉が豊富でリズム感、緊迫感があつてよいが、具体的な場所のイメージが出るとさらに現実感が増すだろう。

中村郁恵氏は、これまで何気ない主婦の日常の中の細かいつとところを見つめ反転させたりする繊細な詩情を発見していた。「たわむれどき」の一連目の出だしは、夏ならば白々明けの窓の外の様子主婦の朝が鋭く伝わってくる。こんな詩を書いた人はいままでなかったと思う。こんなことが詩になるとは思われなかったのだろう。著者の置かれている状況を見つめる詩をこれからも書いていくとよい。新聞の中に著者自身も引きずり込まれるような記事もあるはずだ。そんな格闘詩もできるのではないか。「矛盾」も状況と真摯に向き合っているよい詩だ。十五行目の空は、「か」か「そら」か、ルビがあつたほうがよい。「無」の實在、

いる。一連二連でもう少し具体的形象が伝えられると入りやすい。行分け詩なら句読点はなく、一字明け、行変えて一呼吸置く形式にして、緊張、飛躍を出すこともできる。幸地チカソ氏は、沖縄の側から皮肉の言葉にリズム、流れがあり、朗読するとよい。沖縄方言は、注があつたほうが理解が深まる。

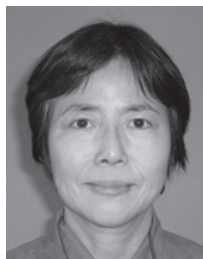
泉水雄矢氏は、異端審問のような恐怖を見つめようとしている。こんな人間の闇はどこにもある。もう少し具体性が出るのとさらに説得力を増す。もう二、三編書いてほしい。阿部久市氏、「虹」「シヨッピングモール」は、詩的な要素を含んだよい着想なのでもう少し長く書いてほしい。「病室」は、現実描写と的確な箴言アフォリズムの秀作だ。感性をもっと深めていくとよい。

渡辺八畳氏、「味蕾に針」「たたかいのまえのたたかい」は、現実の自己批評も含めた現代文化批評詩になっている。社会の現実描写と自己の現実を並列したところがよい。

大門真央氏、「天と地との間に」は、「わたし」というものの不可知性、他者性を表現しようとしている。「あなた」をもう少し具体的、視覚的に表現するとさらに説得力が出る。「滲む」は、散文詩なのでもう少し中心に伝達可能なものを記したらさらに訴える力が強くなる。最終行の「イザヤ漢」は旧約聖書の「イザヤ書巻」のことではないだろうか。「こころあらし」は、意味は明瞭に伝達されている。

ゼロを数として定義したのは古代インドだが、無とは恐ろしいことでもあり、宇宙の果てや死後は今でも未知だ。そんなことを著者は銜いなく表現している。

実川阿仁氏、生き方を模索している気持がよく表現されている。「身に余る人生」は、このような気持ちの詩の形で訴えるには、何か一つの状況の活写をしてみて、そこに象徴的に一つの問いを読者が感じるようにするとよい。後から意識で考えると回想の説明になるので。説明や意味の解説は、評論の仕事になる。「自由前夜」は、現在進行形で提出されていて実感が出ている。ことに最終連は詩的イメージの余韻が残る。



渡辺みえこ

わたなべ みえこ

日本女子大学、文教大学など元大学講師。詩誌「いのちの籠」同人。日本現代詩人会、日本詩人クラブ会員。2009 第59回H氏賞詩集賞選考委員。2015 第47回横浜詩人会賞選考委員長。詩集

『耳』詩学社 1972。『喉』思潮社 1982。『声のない部屋』思潮社 2001。『水の家系』南風プレス 2002。

『空の水没』思潮社 2013（第十回日本詩歌句大賞受賞）。

文芸評論『女のいない死の楽園—供養の身体三島由紀夫』パンドラカンパニー刊 現代書館発売 1997（第一回女性文化賞受賞）など多数。

いい作品が目白押し

五十嵐 勉

インバ氏、「世界樹」壮大な風景を描いているが著者自身の現実をどこかに描いたほうが対比が出る。会話「出て行け」などは、現実的で鮮明だ。多くのイメージが出てくるが、それぞれを大事にして、いくつかの詩になるのではない。重い意味の漢熟語は多用すると意味が薄らぐで、どこかに集中させて他は少し抑えるとうい。

上木戸晃氏、静かな祈りが響く四行詩「観音様を見送る日」は、秀作である。「夏の落とし物」は、少年の日の小石との交流、詩情が溢れている。

近代詩にはよい四行詩があるが、現代詩の口語自由詩は非定型で書かれているので、口語自由詩も書いてみてほしい。

曲田尚生氏、「心臓の天蓋の流動」は、反語や比喩が巧みである。言葉とイメージが溢れていて、言葉によって頼みと表現の欲望が聞きあつて、中心になる主題が伝わりにくい。中心になる主題を三、四連目ぐらいに立てて、あとは抑えたほうが伝わりやすい。「夜霧を纏いて舞う姫」は、ことに二連などは、美しい雰囲気伝わってくる。しかし言語表現が乱舞し、イメージは拡散して雰囲気だけが残る。言葉が残るように具体性を持つ連があるとよい。

色透諷氏は、若さゆえの抵抗の視線が新鮮だ。「淋しさ」は、夏目漱石の小説『こころ』の主題で近代の個が抱えるものだが、色透氏の「自由」の持つ「不自由」さに通じる。そういう視線を深めていけないのではないだろうか。

第一九回現代詩賞は、いい作品が目白押しで、レベルの高い選考になった。特に優秀賞、奨励賞の層が厚く、私が5点満点で付けた採点のうち、優秀賞レベルとする4点以上は一八名に上り、奨励賞レベルの3点以上は二十名にもなった。これは決して私の採点が甘くなったわけではなく、全体がレベルアップし、激戦となったことを表している。勢い、優秀賞に決まったのは、4・5以上くらいの高得点者に絞られる結果となったが、選考は複数で決めるため、評価の違いから、いくらかのずれが生じたことはやむを得ない。例年なら優秀賞となったものが、今年は奨励賞に甘んじることになった境界線近くの差は、結果ほど大きくない。

私が5点の満点を付けて最優秀賞に強く推したのは、河橋氏の「対岸」「干上がる鯨」「玄界灘」である。一八歳で渡米してニューヨークに滞在し、コロンビア大学院映画演出科を卒業という特異な経歴を持つ筆者は、そのアメリカの異空間を日本語の中に取り入れて、独自の力感溢れる詩空間を形成している。英語を交えながらも、不自然ではなく、むしろ日本語の輪郭を強めて、陰影を深めることに

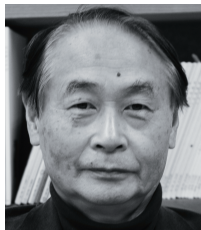
成功している。普通は英語を挿入すると、日本語の言葉は曖昧になり、弱くなるものだが、この「干上がる鯨」は逆に輪郭を濃くしている。これは、筆者の異国での体験が、豊かで力の強い言葉の放出となるためで、日本では持つことのできないイメージや知識が熾烈さを伴うためである。実体験に基づく単語の激しさが、実質的な実質を帯びて投げつけられる。「テキーラと硫黄が混じった空気が濡らす地下」「白目は這い回る負傷兵の血の跡で彩られたサイゴン」などという詩句は、日本の風土では生まれにくい表現である。しかしここにはリアリズムとしての言語存在がある。呻きか吠え声かわからないような擬音語に、「傷ついた神」を重ねる大胆な表現は、確かに世界を斬っている。ここまで裁断できる詩人は、現代では稀有である。

次に4・8の高得点を付けたのは、水庭まみ氏の「アルベド」「誕生」「天国一丁目」と、十路田道広氏の「絶望賛歌」「空白の青春」「命のいたずら」である。

水庭まみ氏は宇宙からの入射光という視点で、今生きている現在を照射して浮かび上がらせる新鮮な言語空間を構築している。この聞き慣れない「アルベド」という言葉は、宇宙からの入射光と反射光の比率を表しているということだが、異質さが神聖さを備えて世界を浮かび上がらせる透明感の世界は、清潔な冴えがある。また「誕生」に見られ

るように、「海流の誕生日」を祝ったり、星々の幽霊をその流れに見たりするスケールの大きな把握をする視点があるが、宇宙を生命体として受け止めて、その循環の中に現在の自分の感触を得る手がやわらかく透き通っている。二十四歳という年齢を考えると、まだまだ伸びそうな気配がある。今後に期待したい。

十路田道広氏は、すでに奨励賞を四回受賞している常連と言つていい詩人だが、今回の作品には、これまでと違った気迫が感じられた。言葉の間に張り詰めたものがあり、引き絞られた弓の弦のような力の溜めがある。そして同時に流れがあり、何かに届くように詠じられる、天への飛翔がある。「叫び声よ空を貫け」など、詩唱の新たな到達を感じた。この気宇を大事にして今後も詩作していつてほしい。



五十嵐 勉 いがらし つとむ
1949 山梨県生まれ
79「流調の島」で群像新人長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンテック主催第1回インターネット文芸新人賞最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館文学賞受賞
他に中篇小説集「ノンちゃん、NONGCHAN／聖丘寺院へ」長篇「破壊者たち」戯曲「核の信託」など

惜しくも奨励賞になったが、今宿未悠氏の「抗体集団」「しおれる／ふたたび」「血縁」は、4・7を付けた作品である。言葉のイメージの結合力が強く、それによって作られる詩空間が広く、躍動が大きい。「氾濫する存在の中に投げ出されて／埋没していける、つまりは赦される、という／その予感あるいは充足が／欲びであること」のように、言葉の飛躍が大きく、しかも緊密感を失わない。詩が言葉の飛翔とするなら、その翔ける翼の力は雄勁である。源となる怒りや反発や抗議が大きい分、その飛躍も大きくなるのだが、世界を否定する力の大きさが、美や親しみから離れていく分、色や形が失われる傾向がある。しかし作者の美点は、人の反応など気にしない、その破壊力と飛翔力にあるのだから、どんなこの詩空間を広げていったほしい。むしろその方向と前進にこそ、神聖や清浄への到達がいつか見られそうである。期待できる。

優秀賞の赤澤玉奈氏の「潜水」「砂浜と同じ熱をしている」「島舞い」は言葉の絡まり合いに快い律動があり、紡ぎの色相の潇洒なりズムが魅惑する。ただ、大きく見えそうに意外に小さくまとまっていく小回りの収まりが、詩の規模を結果的に小さくしている。言語感覚は優れているが、言葉の野心や詩空間への大胆な造形は感じられない。才能はあるとして、この領域で開花するのは、別な志や意気込みが必要だろう。

た表現が感じられる。「新宿駅、午前二時」も前回の「池袋駅——」との連作と見られ、よく都会の裏面の影を捉えて、的確な詩想表現に形作っている。進化を感じた。

奨励賞となった大門真央の「滲む」「ころあらし」「天と地との間に」も言葉に込められた投射力の強さを感じた。直截な表現は簡明で力があり、インパクトは強い。ただ、所々に尻尾を巻くような表現があつて、「センスがあるかもしれないなんて思い耽つて」とか「なんて常套句を隠れ蓑にしようとも」など、せっかくの強さを逆に損ねてしまっている部分が惜しまれる。こうしたところを改善してもっと強さやキツパリとした表現を積み重ねる方向に修練していけば、大きく開花するはずである。

以下奨励賞への感想を続けたいが、若林麻衣子氏の「憧れのマーシャラー」には、何か胸を打たれる響きがあつた。「マーシャラー」は聞き慣れない言葉だが、飛行場で到着した飛行機などを、手旗で誘導する作業らしい。「パドルを手に掲げ合図を送っている」「正しい位置で停止できるよう／任務を遂行している」とあるので、その仕事が類推できる。不思議なのは、その人へ込められた思いの深さ、孤絶した存在への痛切な讀えが最後まで貫かれていることである。この悲痛なまでに寄せる思いとは何か——この祈りの舞には魅了される。

実川阿仁氏は「自由前夜」がよかった。怒りや怨みが露

清水一美氏の「春日」「古墳」は久々の氏らしい静謐のなかに神々しさを表した沈着な作品で、その高雅な造形には心を洗われる。「甘翔る光儀の／白い残り香を／あおい闇に廻り／水面をたゆたう／鷺の白によせる」など、高みへ駆け上る気高い意志は、健在である。

遠藤芳子氏は、八十三歳と受賞者の中では最高齢だが、詩想はむしろいつそう旺盛で、「五月の響き」「五月の雪」「走る『思い出』」は、最愛の我が子の喪失を軸に、悲壮を詠嘆に昇華して、五月の大地の時に巡らせていく。「まっさらな／美しい死の面を／顔に貼り付けて戻ってきた」に込められたリアリティは、技巧を超えて迫ってくる。

木戸秋波留紀氏の作品は特に「見聞」がよかった。「明日、／私の命はないでしょう」という意表を突いた始まりから、虚構舞台を巡らせて「殺される」ことを背後に匂わせつつ、スリリングな劇的言葉を繋げていく。こういう演劇的な詩も可能であることを示していて、新鮮味があつた。「——渚には／未来が打ち上げられていて」という終わり方もいい。

奨励賞に甘んじてもらつた北村灰色氏の「きつと世界の終わり、蒼が砕け散る」は、前回に劣らない出来栄で、むしろ牙えが感じられ、私の評価は高かった。「やがて凝灰するヴァニラと海蒼／影絵の世界は 甘美と溺死に抱かれて／お互いの蒼に浸るから」の部分など、より洗練され

骨に、赤裸々に放たれている。「自由の船」に乗り、街の地獄を船出しようとするときに襲われる恐怖が翼への痛みに変わる最後はクライマックスとしていつそう高揚している。このダイナミックな勇躍フィナーレは素晴らしい。

まだ高校生の色透諷氏「卒業証書」「十八のごときさみしさ」には、切れ味の鋭い刃がある。しかもそれを畳みかけて一つの塔を打ち立てるような樹立造形には、確かな詩才がある。高校生で奨励賞を受賞したのはおそらく初めてと思う。鮮烈な切り込みを繋げながら、長い造形、長い流れを盛り上げ奏でる力も豊かで、反発に裏付けられた弾力が快い詩空間を紡いでいく。今後が楽しみである。



マッシバンバータ氏は、ペンネームを変えての登場で「荒野フルボディ」など力感は増して、前進しているが、他の作品が英語に頼りすぎて、違和感を滲ませていることや、ペンネームを変える必要がどこにあるのか、必然性が見えないところに不満が残った。

橘いずみ氏の「どぶから柱」はタイトルに「どぶ」を持つてくるところで、大いに損をしている。透明な美観やトーンがこの言葉によって損なわれ、純正の趣が濁ってしまった。また他の詩では所々旋律の調子が崩れて、不協

佳作

「限りのない旅」「バリの祭りは終わった」
松原泰子
「一瞬のたわむれ」
岩谷隆司
「サヨウナラ」「旗」
古宮行恵
「令和」
庄司直也
「くらげ狼」
常本哲郎
「月」「愛のことば」「道程」
有澤かおり
「電子レンジ」「愛しくて」「無駄」
黒江修一
「レイン」「展翅」「低体温」
佐藤 裕
「遊戯場への埋没」「死へ」
坂井 傑
「花の調べ」「夜明けの月」「青葉の雫」
角田和美
「生きる意味」「青空に泣く」「丸く眠る」

「硝子の天井」「宗教勧誘お断り」「墓守の鍵」
械冬弱虫
「鱗粉」「現れた母」「サーカス小屋」北川 聖
「来し方行く末」「苛立たしい午後」「役目を果たした約束」
晴野康史
「白い花」「水の孤独」「春のひと時」後藤 順
「四十九日」
齋藤菜摘
「花魁」「フーガの朝」「削除BC」今井葉子
「見つめられて」「越冬」「凍結」金子忠政
「花に尋ねる」「風の声」片岡周子
「七十八億分の一人の螺旋階段」A.MARE
「問」「運針」「約束」村上文緒
「蜂」「硝子」「刃」薬師丸怜央

「罪名」「思い出せないくらいずっと前から」
吉岡幸一
「私は生きている」
「累日」「浮世」「終宴」キネブチタツヤ
「春の衛星」「つよがり」街風さいか
「三百六十五連休」「幕」はしのぶしげ
「鯨の骸」「鋼の星」「光る星」みずぬまけいだい
「ストロベリームーン」「愛しき人へ」
「祈り」永畑加代子
「胸の内の喫水線」「言葉についての二、三のアナーキー」「昏睡のルフラン」舟橋空兎
「はとバスツアー」「声渡る平日」「引力」妻咲邦香
「最果てのイマーム」「君が見ている世界」「トランスジェンダー」レイ
「ランドスケープ」「再見」「砕かれた青いゼリーの光」花水
「孤独な朝に」「終焉の音」三浦恵子
「墮天使エクスタシー（俺が愛した四人の女たち）」「森羅万象の子どもとして」「闇を持つ者へ」貝塚マナ
「八月のカレンダーに裏返しに挟まれた奇妙な風景写真から」「稀に起きる出来事に必ずいえること」「逃げ出したネコを飢え死にさせない方法もしくは使えない解法」正田あゆみ
「紅の涙」「戀」「風吹かば」燕

「LIFE」「反芻する覚悟への独白」CONSONTED25
「僕の部屋」新里 輪
「曲線」「泣くまえに」「生きてゆく」優木絆名
「工場地帯」「波紋」「なるほど彼らはあたまがおかしい」西村 洸
「池上彰」「字幕」「匂い玉」渡部榮太
「狼の読書会」「わかれ」「クリスマススローズ」上原翔子
「写真」「神隠し」愛羽 文
「残響」相河史哉
「息を吹き返す」「舞踏」「万人こそ詩人」原氷
「高校時代」「せなか」「午前五時」井上正行
「麒麟の背鰭」「Sustain」「かもちれんとうかい」まほろばしじみ
「マグダラのマリア」「河川敷」「存在について」斎藤未菜
「DEEP END」「羞恥心」薛沙耶伽
「星を見て、帆を上げる」「あなたが秘密をもつならば」日下直哉
「ハンマーで石塊をたたく」
「BIRTHは虹の色をしづめる」「深海魚」「0地点 on the earth」keisei.hhh(stereotype2085)
「相思」「西から吹く風」「まどろみ」春野太郎
「地獄の蓮」「墮天一夜」「天秤と軍配」藍原知音

和音を出している。脱皮のための滞りとも思えた。

総じて今回の現代詩賞に寄せられた作品は、それぞれの世界での鮮烈な切り結びを示して豊饒だった。現代の組織社会や科学文明の高度化、便利で表面の綺麗なヴァーチャル文化などに汚染されていない真の眼差しや感性をつぶさに見ることができた。この言葉の華が咲き誇ることは、精神の基盤を確かにし、未来を示すものであることを確信する。冒されない人間の感性の母体に触れさせてもらった。



10月30日3時より、第19回「文芸思潮」現代詩賞
選考会はズームで行われた



「アキラメという感情」「立ち話から」「カラスの行水」
横井純子
「石の花」
近藤小百合
「水草の真青の海の色の中」「第六天魔王に捧ぐ愛の歌」「祈り」
青藍
「水風呂」
設楽いくこ
「山は笑う」「晩年は好日」
田村全子

「奏」
市原芙実子
「1月18日」
柏村ねお
「プレゼント」「砂の降る星……」
松岡真弓
「月下の送別」「解離、どこに落ちるのか」「髪の数」
川咲道穂
「魚の国」「詩を産む」「夕焼けは100円で買える」
三日月ユキ

「誰にも通じないことば」「鬼ごっこ」
中川 望
「きみは平戸のビーチへ行ったかい」
永田米吉
「スーパーマンなんかくそくらえだ！」「私のガチ恋する推しに捧げる唄」
三日月李衣
「あつがなく、カラコンロン」「ビューラーのゴムでできた眉毛」
朱泪みね
「居場所」
久保慧眼
「自由帳」「ドブさらい」「心象世界」
ふきのとう
「金婚式」「春の雪」「椿と姉」
春町桃花
「羽化せぬ蛹」「本能」「さるの子」
天ヶ谷麗
「三つの影」
中村 満
「父」「最期の対局」「情動」
「人生はどう笑われるか」「世の中のどこかでなにか」
小山田良三
「どこへの墓石か」
あひこみさき
「しゅんしゅう」「おひめさま」
いまだまりこ
「おそらは きつと」「とんびよ とんび」「路上にて」
「スプートニク」「柔い子供」「渴いている」
道草なずな
「雨音がこだまする」「きみに捧げる言葉」「るるる」
たいらゆきこ
「暗闇を突っ走れ」
田中浩司
「発光抄」「自動販売機」「REリミット」
裏路地ドクソ
「変電所」「デパート」「水像」
青木夕海
「散歩」「終末」
河合麻衣

「宇宙カマド」「手品」
ワタナベモカ
「あるいは未明について」「古屋敷撤去」
後藤敏斤
「あなたが殺した」「夢」「埴輪」
小杉山立夏子
「道徳のお時間」「事情」「変わりゆく概念」
澄乍
「新人」「お金」
中原ねも
「みどりのうた」「淡い大地」「異次元」
羽鳥結人
「薔薇カラル月ヒカル」「捧ぐ」「静かな恋」
ミキコトホ
「メロンパン」「陶器と木匠」「秘跡」
華賀 透
「記憶」「御池の上の」
あぜ
「あとがき」「痴呆人」「砂漠の唄」
鳥の歌
四季長明
「童影」「透明感覚」「燃え上がる秘密」
井澤禎雄
「皐月」
終みどり
「夕立のあと」
猫柳木りさ
「夜の世界には夢の川」「中身とその熱」「おめでどうと言いたい」
蕪木さくら
「月光速」「弦界」「太陽、出づる」
千葉紫月
「春がきたら」「日向を泳いで」「縁結び」
里中美月
「伊集の森」「器物破損」「白百合色の墓標」
琴森 戀
「ノスタルジア」「今日の独り」「行先」
瞭
「げろと種」
こんどうのか
「行進曲」「誰だ」「東京」
花山徳康
「ホーム・スイート・ホーム」「化石をわたる風」「和解」
福永十津